

# 学びの遺伝子

インタビュー／坂本建一郎  
写真／織本知之

教師生活40年。若いときは部活動指導に力を入れ、先輩教師にもまれる中で、教師としての力量を付けてきた。教師という仕事の困難とやりがいは表裏一体。うまくいかないことが多いからこそ、教師の仕事はやりがいがある。

若いうちは試行錯誤や失敗があってもいい。  
現実に負けない「理想」を高く持とう。

◎東京女子体育大学教授／前筑波大学附属坂戸高等学校長

## 服部次郎さん

### 失敗を恐れず、誠意と情熱と努力で押し通す

本誌の読者がこれを読まれるころは、そろそろ教育実習に行く時期だと思います。今は大学教員として学生を学校に送り出す側にいるのですが、以前の高校長の立場のときは受け入れる側にいました。

学生を受け入れる際には、いつも「学生のうちは、最初はきちんとできなくてもいい。授業の進め方がヘタだったり、教える内容が浅くても、それは目をつむる。しかし大切なのは、誠意であり、児童生徒に対する責任感で、目の前にいる子どもたちと正面から向き合っていく、というその気持ちが大切だ」と思っていました。その考えは今でも変わりません。今はちょっとした失敗で落ち込んだり、もう駄目だと思い込んでしまう若い人たちが多いのですが、経験のない学生は失敗して当然なんです。だから小さな失敗などは気にしないでいい。

教育実習生や新人教師のころは、授業などでも、児童・生徒の質問に答えられないことがあるかもしれません。そうしたときにあいまいに答えたり、適当にごまかすのではなく、「今はちょっと先生も分からないけれども、きちんと調べて、次の時間に教えるから」とその場は謝って、それから猛勉強をすればよいわけです。嘘をつかない、ごまかさない、そういう態度が何よりも大切です。

教師という仕事は、着任したら、新任だろうがベテランだろう

が、同じ教壇に立って、授業をしなくてはなりません。その意味では、教員採用では即戦力が求められます。だから、民間企業のように、先輩にしごかれながら少しずつ仕事を覚えたり、人事異動を繰り返すうちに総合的な職能を身に付けていくような仕事の覚え方とは、異なる面もあります。しかし、学校現場での実践経験のない若い教師に即戦力になれと言っても、それは無理だと思えます。教師だって学校現場でさまざまな実践経験を積んで、一人前に育っていくのですから。若いときは失敗もあるし、仕方のないこともたくさんある。だからこそ、大切なのは、授業のテクニックや知識の量ではなくて、教師としての誠意と情熱なのです。教育実習では失敗を恐れず、誠意と情熱と努力で子どもたちと向き合ってほしいと思います。

### 教師の仕事

教師の仕事は、第1に授業、第2に校務分掌、第3に部活動などです。学校現場では「私は部活動が忙しいので授業の準備ができない。校務分掌を少なくしてほしい」ということを平気で言う先生がいるのですが、これは間違いで、校長だったころはそれは違うと厳しく指導してきました。

教師の本務は第1に授業です。この本務をおろそかにしてはいけません。授業は事前に指導案を作って、指導内容をしっかりと





勉強して、綿密に計画して臨んだ授業でも、教室では児童・生徒の反応は予想外だったり、うまく伝わらなかったりするものです。授業を自信を持ってできるようになるには、長い時間がかかります。教える内容も時代と共に変化していきますし、その意味で、教師は一生勉強です。まず、若い教師は授業がしっかりできるように努力しなければなりません。

その次は学級担任や教務部・生徒指導部などの校務分掌の仕事です。これは学校も一つの組織体であり、教員各自が組織の一端を担っていくための職務です。教師は学級担任をして一人前と言われますが、これもいいことばかりではありません。中には反抗的な子どもがいたり、いじめや非行の問題に手を焼いたりします。教務部などの校務分掌の仕事では、他の教師との協調性が求められますが、これも教師社会特有の人間関係の難しさに悩んだりもします。

その点、部活動の指導には、甘い誘惑があります。部活動で教える生徒は、一つの目的のために集まっている生徒たちなので、教師の意のままに指導することができます。その上、大会などで結果を出していければ、成果も分かりやすいし、子どもたちとも心を通い合わせて、いろいろな思い出もできるでしょう。教師の評価も上がります。教師にとって、こんなに楽しいことはありません。

だから、私は部活動の指導は大いにやるべきだと思っています。しかし、それは、授業や校務分掌をおろそかにしてやるべきことではないと言っているのです。部活動で実績を上げているからといっ

て、授業や校務分掌をいかにがんばる教師にはなってほしくないということです。

授業や校務分掌は自分の思うようにはいかず困難も多いけれど、しかし、そうした困難に立ち向かっていくのが教師の仕事の本務であって、どんな児童・生徒のためにでも分け隔てなく、平等に接していかないとはいけません。そうした中で教師としての職業能力や教師として最も大事な人格が高められていくのではないかと思っています。

## 教師の条件

教師の第一の条件は「教えることが好き」だということです。そのためには、児童・生徒と積極的にかかわらないといけないし、そのための工夫やコミュニケーション能力も求められます。だから、究極的には「人が好きであること」が教師の第一の条件と言えるでしょう。

教師にはいろいろなタイプがいるべきだと思うし、むしろ、多様な人材がいないと学校としては駄目だと思います。教師集団は個性豊かでないといけない。なぜなら、学校もまた、一つの社会だからです。

しかし、多様な個性を持つ教師集団も、そのベースにあるものは1つだと私は思います。自分のスタイルを持つこと、これが教師の第二の条件です。



教師としての自分なりのポリシーやスタイルをはっきりと持っていることが「個性的な教師」ということだと思います。言い換えれば「軸がぶれない」ということかもしれません。「裏表がない」とも言えるでしょう。

そうした個性的な先生は、不思議と子どもたちの人気も集めて、子どもたちにも愛されるし、叱られても納得がゆくし、「叱られて嬉しい」ということも起きます。

今、話しながら、私自身が尊敬しているかつての同僚の先生のことを思い浮かべていたのですが、その先生は、いわゆる「体育会系」で、授業も部活指導も厳しいことで有名でした。生徒指導部を担当してワル連中にもらみをきかせていました。怒るときは本当に恐くて、ワル連中も震え上がるのですが、そこに生徒への大きな愛情が込められていて、生徒たちも不思議とその先生を慕っているのです。大酒のみで夜遅くまで飲んでいるけれども、翌朝は誰よりも早く学校に来て、仕事を始めています。学校行事のときなどは先頭に立って誰よりも体を動かします。それで、意見もしっかりと持ち、生徒をより良く育てるという軸がぶれないから、生徒たちにも尊敬されているし、同僚教師たちも一目置いている、皆が信頼を寄せているわけです。

もう一人の先生は、反対に静かな穏やかなタイプで、日本史の先生だったのですが、いつも本を読んで勉強をされておられました。文系の先生なのに、理系のことなどにも詳しく、本人は「雑学です」と常に謙遜されておられましたが、とても博学でどんな分野にも高い見識を持っておられました。この先生の授業は淡々としていて、派手なパフォーマンスがあるわけでもないし、授業も一見地味です。しかし、内容がしっかりしているから、生徒たちの信頼も高く、放課後にはいつも生徒たちが質問に来ていました。

先ほども言いましたが、学校には、多様な先生がいて、それがあある意味において、社会を構成しているわけです。教員集団が多様で豊かであると、それを児童・生徒たちはきちんと見ていて、多くのことを学びます。時には教師同士の意見のぶつかり合いがあるかもしれない。しかしそれは社会の中では当然あることです。

教師たちがつくる人間関係の豊穡さがそのまま児童・生徒の教育につながります。だから、学校という場所は、多様で豊かな個性あふれる教師集団の場所ではなくてはならないと思います。

## 教職の特性

教育の仕事と、民間企業の仕事などで比較したときに、決定

的に違うと思われることの一つは、「成果がすぐには表れない」ということです。

教育の成果は、数十年後に表れることだってあります。だから数値にはしづらいものがあります。

長い間、教師をしていると同窓会にも呼ばれるようになり、新人のころに担当していたクラスの子どもたちもあつという間に、30代、40代となっていきます。そんな同窓会のときに「先生、あのとき、言われたことが今になってやっと分かったよ」と言われたりすると、もうこれは教師をやっていてよかったなとつくづく思えます。これが教育の成果だったりするのです。

昔はよく対立して、けんかばかりしていたけれども、大人になってみれば、かつての生徒と友達になれるということだってあります。

教師という仕事は、結果はすぐには見えないけれども、必ずいい事が後からやってくる。そういうものです。

だから、教師を続けていく上で、大切なことは、「教師としての自分なりの理想」を高く持つことです。「自分なりの理想の教師像」と言ってもいいかもしれません。そういう理想を高く持っていないと、教師というのは、大変な職業ですから、厳しい現実に向けて、薄汚い、汚れたものになってしまうかもしれません。困難な現実に基づいたときに、すぐに現実に向けて逃げ出ししまうのは、理想を高く持つことができなかつた教師です。理想があれば、もし挫折したとしても、また立ち上がることができる。だから、教師を目指す人は、自分なりの理想の教師像をしっかりと持たなくてはなりません。なぜ、教師になりたいのか、教師になって何をしたいのか、自分はどんな教師になりたいのか、そのところをしっかりと考えて、たくさんの若者が教師を目指してくれることを期待しています。苦労も多いけれど、教師は、素晴らしい職業です。

## 服部次郎／はっとり・じろう

1943年生まれ。東京教育大学文学部卒業後、東京教育大学附属坂戸高等学校教諭、筑波大学附属坂戸高等学校教諭、副校長を経て、2002年4月より筑波大学教授(附属学校教育局)、筑波大学附属坂戸高等学校長。2006年4月より現職。文部省「総合学科の今後の在り方に関する調査研究協力者会議」委員、全国高等学校長協会理事など公職を歴任。

# 教員養成セミナー

特別定価1400円

Success navigation magazine

2007 June Vol.29 No.12

6

特集①

## 人権・同和教育を学ぼう!

人権感覚を磨くことが大切  
人権教育の意義と、教師自身の人権

特集②

## 特別支援教育のいま

新連載

## 重要教育答申を総確認!

2007年度試験合格者に聞く  
直前3カ月勉強法

巻末特別付録

直前対策!

ポイント・アップカード

〈教職教養編/一般教養編〉

